

愛の呪文たち

穂村 弘

短歌は五七五七七。俳句と川柳は五七五。とても短い言葉でできている。だから、新聞記事や小説のように、いつでもどこでだれがなにをなぜどうした、ということすべて説明することはできない。長さが足りないのだ。その代わり、まったく別の方法で想いを手渡そうとする。

例えば、この本にはこんな俳句が載っている。

鞆(しゅうせん)は漕ぐべし愛は奪ふべし

三橋鷹女

「鞆」とはブランコのことらしい。「ブランコは勢いをつけて漕ぎなさい。好きになつた人の愛は奪いなさい」と本書の解説文に書いてある。なんだか不思議だ。だって、わざわざ云われなくてもブランコは漕ぐに決まっている。他に使い道がないんだから。だけど、愛の方はぜんぜん違うと思う。好きな相手に巡り会った時にどんな態度をとるかは、人によってさまざまだろう。そこにはたくさんの選択肢があるのだ。

でも、と思う。だからこそ、作者は敢えてこの二つを一緒に並べているんじゃないか。ブランコが漕ぐしかないように、どうしても手に入れたい愛は奪うしかない。他に道はない。さまざまな選択肢を前にして迷っている自分自身に向かって、そんな風に云い聞かせるために。そう考えると、「鞆は漕ぐべし愛は奪ふべし」が、本当の愛に直面した人間に危険な勇気を与える言葉に見えてくる。

もう一つ注目したいのは、この俳句のリズムだ。口に出して読んでみると、「べし」

「べし」という繰り返しが、独特の調子を作り出していることに気づく。その感覚は何かに似ている。そうだ。まるで、ブランコを漕いでる時みたいじゃないか。ブランコを漕ぐリズムでブランコのことを云い、その流れのままに愛についての想いが語られる時、言葉の意味に加えて音の力が宿る。それによって、単なるメッセーが呪文に変わるのだ。

もう一つ、今度は短歌を挙げてみよう。

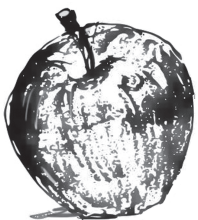
君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎(りんご)の香のごとくふれ
北原白秋

百年も前に作られた歌だ。「君かへす朝の舗石さくさくと」という情景から「雪よ林檎の香のごとくふれ」への飛躍に、はっとさせられる。「君が雪を踏む音がさくさくと聞こえる。雪よ、すがすがしい林檎の香りのように、恋人をやさしく包んでくれ」と解

説されている。この「さくさく」は確かに「君が雪を踏む音」なんだけど、同時に林檎を齧る時の音にも似ている。そして、雪の白さは林檎の白さに繋がる。そこから、「雪よ林檎の香のごとくふれ」というイメージが浮かんだのだろう。

雪の白さと冷たさ、林檎の味と香り、そしてさくさくという響き。ここには視覚、触覚、味覚、嗅覚、聴覚という五感の要素が全て含まれている。だからこそ、百年という時間を超えて我々の心に響く歌になったのだろう。

この本には、そんな愛の呪文たちが詰まっている。口に出して唱えてみよう。



大人になるまでに読みたい
15歳の短歌・俳句・川柳
①愛と恋

【目次】

巻頭文 愛の呪文たち 穂村弘 i

この本を読むにあたって 4

恋の風景 7

突然炎のごとく 43

シニカル、アイロニカル 87

愛と恋のひととき 119

家族、友とともに 149

エッセイ 愛って、なんだ？ 黒瀬珂瀾 173

本巻編集 黒瀬珂瀾

短歌選・解説 黒瀬珂瀾 / 俳句選・解説 佐藤文香 / 川柳選・解説 なかはられいこ

表記について

*収録した作品については漢字は新字で表記しました。/*仮名づかいについては、その作者の作品集などを参考にしました。旧仮名づかいの場合はそのままとしました。/*ふりがなは底本としたテキストに付けられているものは、そのままとしました。読み方が難しいと思われる語には（ ）としてふりがなを付けました。/*作品の一部に、現在から見て人権にかかわる不適切と思われる表現・語句が含まれていますが、作者の意図はそれら差別を助長することにはないこと、そして執筆時の時代背景と、文学的価値を鑑み、原文を尊重しそのままとしました。

(編集部)



この本を読むにあたって

- ・この本は「短詩型」と呼ばれる文学作品を収録しています。
- ・「短詩型」とは、短歌、俳句、川柳といった、五・七音の韻（＝リズム）を持つ短い詩のことです。基本的には短歌は五・七・五・七・七、俳句と川柳は五・七・五のリズムで作られています（変わったリズムを持つ場合もあります）。
- ・ページごとに作品が紹介されています。ページの構成については左のページを参考にしてください。
- ・短詩型の作品はリズムカルなことがその最大の特徴です。気になった作品があったら声に出して読んでみるといいでしょう。

右は作者名です。左の大きく書かれているのが作品です。下に「か」「で」で記されているのは、作品が収録された本、雑誌です（ない場合もあります）。

三橋鷹女

鞆（しゅうせん）は漕ぐべし愛は奪ふべし

『白骨』

鞆（しゅうせん）は漕（こ）ぐべし（し）、春の季語です。漕（こ）は勢（いきほ）をつけて漕（こ）ぎなさい。好きになった人の愛は奪（うば）いなさい。助動詞「べし」の強い反復が、私たちが読者を愛へと駆り立てます。

季語＝鞆（しゅうせん）（春）

三橋鷹女（みつはし・たかじよ）
一八九九―一九七二 俳人。千葉県成田市生まれ。
成田高等女学校卒。卒業後上京し、与謝野晶子や若山牧水の影響下で作歌を始める。一九三二（大正一〇）年、俳人でもあった歯科医師・東謙三と結婚し、句作を始める。小野無子の「鶴頭陣」や富沢赤黄男の「俳句評論」に参加。句集に『向日葵』（昭和一六年）『羊歯地獄』（昭和三六年）などがある。

選者による解説です。

俳句作品で季語のある

場合は説明があります。

作品のジャンルです。

短歌は短

俳句は俳

川柳は川柳。

作品の作者のプロフィールです。

恋の風景



寺山修司

海を知らぬ少女の前に麦藁帽(むぎわらぼうし)のわれは両手をひろげていたり

『空には本』

少女は、海を見たことがないという。「海ってどん

なの?」「そう聞かれた少年のぼくは、せいじつばいに両手を広げて、「こんなに広いんだよ!」と一生懸命に教えてあげた。まだ広い世界を知らない少女に、ぼくはいろんなことを話してあげたくなった。麦藁帽をかぶっていた少年のころの思い出が、ふとよみがえります。あの子、今、どうしてるんだろ?」

短

寺山修司(てらやま・しゅうじ)

一九三五〜一九八三 青森県弘前市生まれ。県立青森高等学校を経て、早稲田大学教育学部に入り、作歌を始める。在学中に「短歌研究」の新人賞を受賞。第一作品集『われに五月を』(昭和三十三年)。第一歌集『空には本』(昭和三十三年)、評論に『書を捨てよ、町へ出よう』(昭和四十二年)など。その後は詩歌にとどまらず、放送詩劇、シナリオ、劇団「天井桟敷」での活動、映画製作など幅広い活動を展開する。肝硬変により四七歳で死去。